バッタ派の真理論
——Nyāyaratnamālā を中心に——

若原雄昭

I

バッタ派 (Bhāṭṭa) ミーマーンサーを代表する著者 Pārthasārathimiśra(10 c) には，Nyāyaratnamālā (NRM)，Tantraratna (Comm. on Kumārila's Tuṭīkā)，Śāstradīpikā，Nyāyaratnākara (Ślokavārttikavyākhyā) の四著作が伝えられており，NRM は彼の最初の著作であると考えられている[1]。同書の第二章は「知識の自律的<真>の確定 (Svataḥpṛmāṇyanirṇaya)」と題され，同学派の知識論の中心的命題である svataḥprāmāṇyavāda を扱った最良のモノグラフとも評される[2]。NRM は一般にプラバーカラ派批判の書とされるが，この第二章は必ずしもそうではない。同章の主眼は svataḥprāmāṇya 理論の解釈をめぐるバッタ派内部の異論を整理して著者自身の解釈によりこれに決着をつけることにあり (Pārthasārathimiśreṇa svataḥprāmāṇyanirṇayaḥ/vyākhyāvivādasaṁjātamohavyāvṛttaye kṛtaḥ//NRM Ⅱ-4)，最後に知識の真は他律的 (paratas) であり偽は自律的であるとする仏教徒に帰せられる説に対する批判という形でバッタ派の定説が提示されている。また Kumārila の今は散逸して伝わらない著作 Bṛhaṭṭīkā からの引用が相当数見いだされるという点でも本章は注目に値する。本稿では著者 Pārtha が言及批判する二つの Pūrvapakṣa の検討と，各々の具体的な著者への比定を中心に論じてみたい[3]。

Ⅱ

Pārtha は章冒頭の詩節 (vijñānasya pramāṇatvaṁ svato nirṇīyate yathā/parataś cāpramāṇatvam tathā nyāyo 'bhidhīyate// 知識の真は自律的に確定され偽は他律的に確定される，という論証が述べられる。NRM Ⅱ-1) によって主題を明示した後，次の Ślokavārttika (ŚV) Ⅱ-47を引いて具体的な論究に移る：

svataḥ sarvapramāṇānām prāmāṇyam iti gamyatām/

na hi svato 'satī śaktiḥ kartum anyena śakyate//ŚV Ⅱ-47

全ての知識の真は自律的であると考えるべきである；自律的に備わっていない能力が他によってもたらされることは有り得ないからである。

種々の書に引用される Kumārila のこの著名な詩節をめぐる注釈者たちの解釈の相違を Pārtha は整理して列挙している (tatra vyākhyātāro vivadante—svaśabdaḥ kim ātmavacana ātmīyavacano vā, tathā prāmāṇyaṁ kiṁ svato bhavati kiṁ vā bhāti, tathā prāmāṇyaṁ nāma kim arthatathātvaṁ kiṁ vā tathābhūtārthaniścāyakatvam iti. NRM p. 48, 11. 3—6) が，注釈書 Nāyakaratna の与える説明と NRM 自体の後の記述に従えば，その論点は概ね以下のようなものとなる：

(1)「自律的」と訳した svatas の sva- の語義は「自ら」(ātma) であるか「自らの」(ātmīya) であるか。つまり，当の知識それ「自ら」によるのであって他の知識を要しないという意なのか，それとも知識それ「自らの」諸原因にもとづくという意なのか。

(2) 真 (prāmāṇya) は「自律的に生じる svataḥ bhavati (＝jāyate)」のか「自律的に確認される svataḥ bhāti (＝jñāyate)」のか。つまり，Kumārila の意図は真の発生 (janman. utpatti) に於ける自律性にあるのか，真の確定 (nirūpaṇa, niścaya) に於ける自律性にあるのか。

(3) 真の定義 (lakṣaṇa) について：真とは「対象の如実性 (arthatathātva, arthasya tathābhūtatva)」として定義されるような，対象の側にある属性 (viṣayadharma) であるのか，それとも「(知識に) 対象とのズレがないこと (arthāvyabhicāritva)」，「(知識が) 如実な対象を確定するものであること (tathābhūtārthaniścāyakatva)」，「(知識が) 如実な対象をその認識境界としていること (tathābhūtārthaviṣayatva)」と定義されるような，知識の側の属性 (jñānadharma) であるのか。

三つの論点について各々二つの選言が挙げられていることになるが，実際に取り上げられる組み合わせは，後述する二つの Pūrvapakṣa のそれに尽きている。これは，Pārtha が知っていた ŚV の注釈者が恐らくこの二人だけであり，彼らの解釈に対する批判的検討の過程でこれらの選言からなる三論点が抽出されたものであることを示していよう。ともかく，Pārtha はこれらの異論に対して詳細な論駁を加える前に，次の詩節によってやはり上述の選言を組み合わせた形で先ず簡潔に自説を提示する。

ātmavācī svaśabdo 'yaṁ svato bhāti pramāṇatā/

arthasya ca tathābhāvaḥ prāmāṇyam abhidhīyate// NRM Ⅱ-2

この sva という語は「自ら（ātma)」の意味であり，〈真〉は自律的に確認されるのであり，〈真〉とは対象の如実性のことである。

彼によれば，svataḥ-prāmāṇya とは，あくまで対象の側に客観的に実在する属性としての<真>が，当該の知識それ自身によって，つまり後の他の知識による検証を待たずに，確定されることに他ならない。この Pārtha の見解の意味は彼が批判する二つの異説と対比することによって明瞭になる。

Ⅲ

Pārtha が言及する第一の Pūrvapakṣa は以下のようなものである。

これについて先ず或る者が言う――：知識の真とは対象を逸脱しないこと（arthāvyabhicāritva）であり，如実な対象をその認識領域としていること（tathābhūtārthaviṣayatva）である。それは諸知識に必ず自律的に発生する（svata eva jāyate)。この sva の語は「自らの（ātmīya)」という意味である。自らの原因のみにもとづいて知識には如実の対象をその認識領域としているという性質（i.e. 真）が発生するのであり，［知識の諸原因にある何らかの］特性（guṇa）にもとづいてではない。一方知識の偽は，非如実の対象をその認識領域としていること，と定義され，これは自らの原因のみから発生するのではなくそこにある欠陥（doṣa）にもとづいて発生するから他律的と言われる。…(中略)…。故に対象との一致（yathārthatva）と定義される真が自らの原因から発生するのであり，確認されるのではない（na tu bhāti)。というのも，知識は対象を照らすことのみ（arthaprakāśamātra）に費やされるので，自身や自身の真を理解せしめることはないから。一方，対象との不一致と定義される偽は，他律的に，つまり原因の欠陥にもとづいて，発生する。こういう訳でヴェーダは欠陥がないので真なのである。(NRM p. 58, 11. 10—21)

先ほどの選言を用いれば，真は知識の属性であり，その自律性とは発生に於けるそれであり，それは当該の知識自らの構成要因のみに由来する，とするこの解釈は Ślokavārttikavyākhyā の著者 Uṁveka(ca. 700-750）の以下の記述に一致する[4)]。

pratyakṣādīnāṁ pramāṇānām anvayavyatirekābhyām arthāvisaṁvāditvaṁ prāmāṇyam avagamyate.…… tatra 'svataḥ sarvapramāṇānām' (ŚV Ⅱ-47a supra) iti pūrvārdhena vijñānahetūnāṁ prāmāṇye 'pi vyāpāra iti pratijñātam. uparitanena sāmagryantarābhāvas tatra hetur uktaḥ—'na hi svato 'satī śaktiḥ kartum anyena'

vijñānasāmagryatiriktena 'śakyate' (ibid cd) iti. śloke cātmīyavācakaḥ svaśabda iti. atha vā indriyādisāmagrīmātrajanyo bodhaviśeṣa eva pramāṇam. ..... tasmāt pramāṇam utpattāv eva vijñānahetūn apekṣate, notpannaṁ svakāryeṣu svagrahaṇam. tad anena ślokadvayena (viz. ŚV Ⅱ-47 & 48) svotpattau svakārye ca sāmagryantaraṁ svagrahaṇāpekṣatā ca nirastā. apekṣādvayarahitaṁ ca pramāṇaṁ svata ity ucyate.

この Pūrvapakṣa に対して Pārtha は先ず上引の ŚV Ⅱ-47・48 の直後の ŚV Ⅱ-49～51 を引き，その主旨が無限遡及 (anavasthā) の過失の指摘による parataḥprāmāṇya 説批判であって，それは確定に於ける真の自律性を前提としなければ成り立たないと批判する。更に自説の根拠として ŚV Ⅱ-66, 67, 53, 34 ff. を引き合いに出し，Uṁveka の解釈は Vārttikakāra 即ち Kumārila の意図したものではないと結論する。因みに，Uṁveka 注と共に ŚV を読んだらしい Śāntarakṣita と Kamalaśīla は，Tattvasaṅgraha (-pañjikā TSP) 第25章 Svataḥprāmāṇyaparīkṣā に於いて，知識の能力 (śakti) としての prāmāṇya の発生に於ける自律性に関してはミーマーンサー学派と彼らの間に見解の相違はないと明言し (TS vv. 2826—2828)，彼らが（おそらく Bṛhaṭṭīkā から）引用する Kumārila の説も確定に於ける自律性に言及するものが多く (e.g. TS vv. 2847—2849)，議論の応酬は専ら確定に於ける自律・他律の問題に集中している[5]。Kumārila の svataḥprāmāya 理論の本質が真の確定の側面にあるとする Pārtha の見解も，こうした歴史的経緯を背景としていると考えられる。

他方，Uṁveka が自律性を発生に於けるそれに限定し確認に於ける自律性を認めないのは，上引の記述からも分かるように，知識の属性である真が知識自身によって自律的に確認されるとすれば必然的に知識の自己認識 (svagrahaṇa) を承認しなければならなくなると考えるからである。よく知られているとおり，バッタ派ミーマーンサーの定説では知識の自己認識或いは自己顕照 (svaprakāśa) は決して認められない。これに対し，確定に於ける自律性を主張する Pārtha は，真を知識の属性ではなく対象の側の属性であるとし，知識がそれをありのままに反映することが知識自身の真の確定に他ならないとすることによって，巧みにこの定説との矛盾という難問を回避したのである[6]。

Ⅳ

続いて Pārtha は第二の Pūrvapakṣa を次のように簡潔に紹介する：

一方，別の者は言う——：以前に知られていなかった如実の対象を確定するものであ

ること（anadhigatatathābhūtārthaniścāyakatva）が真である。それは知識にとって自律的に生じる。sva の語は「自ら」という意味である。如実の対象の確定（i.e. 真）は知識の自体のみから（jñānasvarūpād eva）発生するのであり，特性の認識・整合性の認識・効果的作用の認識によるのではない；無限遡及となるからである。一方，対象の誤った確定（arthānyathātvaniścaya i·e. 偽）は他律的に，つまり欠陥の認識及び訂正知によって，生じるから他律的と言われる。(NRM p. 50, 11. 16—19)

この説はたぶん Ślokavārttikakāśikā の著者 Sucaritamiśra の以下の記述の要約と見て差し支えないと思う[7]。

na tāvad guṇajñānāt saṁvādajñānād vā prāg jñānaṁ na jāyata eva. na votpannam api saṁśayātmakam avabhāsate. na hi syād vā ghaṭo na veti indriyasannikṛṣṭaṁ ghaṭaṁ budhyāmahe, api tarhi ghaṭa evāyam iti niścayātmakam eva jñānam utpadyate. ata eva jñānotptter anantaram eva sarvapramātṛīṇāṁ vyavahārapravṛttir upalabhyate. bhrāntisaṁviditarajato 'pi hi samyagrajatabodha ivārthakriyāyai ghaṭamāno dṛśyate. tad asya saṁśayānasya nopapannnam. ato jāto niścayaḥ. kim anyat prāmāṇyaṁ bhaviṣyati? saty api saṁvāde guṇajñāne vā tāvad eva prāmāṇyasya tattvaṁ, nādhikaṁ kiñcid iti kiṁ nas tadupekṣaṇena?..... ataḥ svābhāvikam eva sarvasaṁvidāṁ niścayātmakatvam. āśaṅkā tu yadi nāma jātu jāyate, evam api tannirākaraṇārtham apavādasadbhāvābhāvāv anusartavyau, na saṁvādaguṇajñāne. tadupekṣāyāṁ hi prāmāṇyam eva nāvatiṣṭheta. guṇasaṁvādajñānayor apy evam eva sāpekṣatvena prathamajñāne prāmāṇyaśaktyādhānāśakter apy anavasthāpātād ity...

この Sucaritamiśra 説も，やはり真の発生に於ける自律性と解しているという一点で Pārtha を満足させるものではない。Pārtha は批判する——

知識はその真の発生について当の知識自体のみに依存し，知識の諸原因の特性の認識といった後の他の知識に依存しない，ということが svataḥprāmānya 説の主旨であるとすれば，偽の発生についても欠陥の認識及び訂正知が原因だと言わなければならない。ところが，原因の欠陥の認識あるいは訂正知によって偽が発生するということは有り得ない。訂正知などによって，貝を銀だとする知識に偽が生じるのではない；それは生じたときにすでに偽なのだから。偽とは非如実な対象の確定であり，それは自律的に偽知から生じるから訂正知などを必要とはしない。生じたときに真知であったものが後に訂正知によって偽知とされるのではなく，生じたとき既に偽であったものが訂正知によって明らかとなるのである。(NRM p. 50, 11. 20—31 取意)

かくして彼の自説が次の詩節によって結論的に示される：

buddheḥ svīyaṁ pramāṇatvaṁ svata evāvagamyate/

parataś cāpramāṇatvaṁ doṣabādhakabodhataḥ// NRM Ⅱ-3

知識自身の真は自律的に確認され，偽は欠陥の知・訂正知によって他律的に確認される。

恐らく Pārtha は仏教論理学派の著者たちの発達した prāmāṇya 論に接して先行する二注釈の svataḥprāmāṇya 理解に不備を見いだし，前者の影響の下に彼自身の新たな学説を形成したものと思われる。

---

1) NRM, G.O.S. No. LXXV, Baroda 1937, Introduction, p. XII

2) G. Jha & U. Mishra, Pūrva-Mīmāṁsā in Its Sources, Benares Hindu Univ. 1942, Appendix p. 38.

3) 同章全体の和訳研究を龍谷大学論集第443号（1993年12月）に掲載予定である。

4) Ślokavārttikavyākhyā Tātparyaṭīkā, Univ. of Madras, 1971, p. 53, l. 22—p. 55, l. 23. J. Taber もこの説を Uṁveka に帰している (John Taber, What Did Kumārila Bhaṭṭa mean by Svataḥ Prāmāṇya? JAOS 112—2, p. 208 ff.)。尚この Taber 論文については小野基氏の御教示を得た。

5) Devendrabuddhi, Śākyabuddhi に於いて既に同様であることは，稲見正浩，仏教論理学派の真理論，渡辺文麿博士記念論文集「原始仏教と大乗仏教」，1993に詳しい。又 TS が後代のバッタ派の文献に引用される例は Nītitattvāvirbhāva, Trivandrum Sanskrit Series No. 168, 1958, pp. 33—34 に見られる。

6) これが，prāmāṇya が対象の側の属性であるという一見奇異な選言の持つ意味であり，Pārtha 自身が後にこう述べている：yadvastuto jñānasya prāmāṇyaṁ yadvaśāj jñānaṁ pramāṇaṁ bhavati, tat pramāṇabuddhiśabdayor bhāvakatayā labdhaprāmāṇyapadābhidhānīyakam ātmanaiva jñānena gṛhyata ity ucyate. kiṁ punas tat? arthatathātvam. idam eva hi jñānasya prāmāṇyaṁ yad arthasya tathābhūtatvam; tathābhūtārthasya jñānasya prāmāṇyāt. (NRM p. 52, 11 23—26). 同様の記述は Nyāyaratnākara ad ŚV Ⅱ—84 にも繰り返される：na jñānasambandhitvena prāmāṇyaṁ gṛhyata iti brūmaḥ, kin tu viṣayatathātvaṁ tad vijñānasya prāmāṇyam; tannibandhanatvāj jñāne prāmāṇabuddhiśabdayoḥ. tac cājñātād eva jñānāt svata eva gṛhītam ity anarthakaṁ pramāṇāntaram iti.

7) Ślokavārttikakāśikā, Trivandrum Sanskrit Series No. XC, 1926, p. 89, 11. 4—23. 従って Sucarita は Pārtha 以前の人である。因みに U. Mishra は Sucarita を Pārtha 以降の 12c. とし，G. Jha は Pārtha 以前とする (Jha & Mishra, op. cit., p. 22 & appendix p. 37)。

〈キーワード〉prāmāṇya, Kumārila, Pārthasārathimiśra

（龍谷大学講師）